様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：２８００３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５９３２４０

研究課題名（和文）看護基礎教育におけるコミットメント能力の育成と評価法

研究課題名（英文）Develpment and Evaluation for Comiitment competency on the Nursing Education

研究代表者
金城　祥教（KINJO, YOSHINORI）

名桜大学・健康科学部・教授

研究者番号：００２０５０５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：名桜大学人間健康学部看護学科においては、学生の主体的な学習能力の育成（自己教育力の育成）をめざした小人数ゼミによる参画型教育を展開してきた。教養演習ゼミにおいて学生の成長しつづける力としてのコミットメント能力を育んできたが、これらの教育実践の評価指標について検討し、今回、ゼミ単位ごとの学生グループにSYMLOG分析を用いて学生の自己評価、他者評価をグラフ化して明示しフィードバックを行った。その結果、学生が自ら成長していくための課題の発見とその目標に向けて自己投入する能力（コミットメント能力）の測定指標としてSYMLOG分析のP-N,U-D　Dimensionが有効であることが示唆された

研究成果の概要（英文）： The purpose of this study was to develop “Evaluation Index” of teaching method which increases the level of commitment ability of nursing students who took part in the fundamental course of nursing education. This research applies SYMLOG Analysis Evaluation Method.This study has been conducted in order to find out the effectiveness and efficiency of this methodology as an instrument of evaluative index to create students commitment. SYMLOG Analysis Evaluation that may be usefull of P-N Dimension and U-D Dimension

研究分野：看護教育

キーワード：看護基礎教育　コミットメント能力　SYMLOG分析　自己評価力　自己教育力　評価法

１．　研究開始当初の背景

平成21年3月に厚生労働省の「看護の質の向上と確保に関する検討会」中間とりまとめにおいて、新人看護職員の早期離職防止のための看護基礎教育の充実を図るべきと提案している。その提案をうけてさまざまな研究や検討の結果、新卒看護師は「物事を自分で判断できない」、「主体的な行動ができない」、「対人関係が苦手でチームで行う仕事が困難である」、「患者の安全性を保つ実践技能が未熟」などの要因が職場において、適応困難を生じ早期離職につながっていると考えられた（糸井 2005、藤野 2005）。これらを研究者らはコンピテンシーモデルの視点から検討を行い、主体的な学習者として成長していくための**キーコンピテンシー**として、「回避することなくその場に踏みとどまる力」「場や状況に自己を投入する力」「未来へ自己をプロジェクトする力」、いわゆる**コミットメント能力**の育成が看護基礎教育において重要であることの結論を得た。

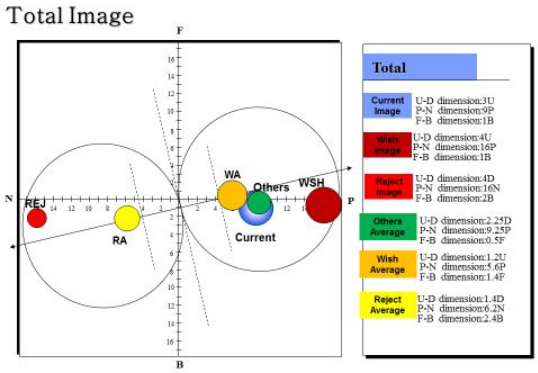
本学においては、少人数制によるゼミワークを中心とした参画型看護教育を2007年の開学以来完成年度を超えても尚継続して取り組んできた。

「聞く力」「表現する力」等が身に付くなど、一定の成果が見られているが、指導方法の標準化やコミットメント能力の評価基準の統一がはかれていないという課題が残されていた。本研究の課題は看護基礎教育における学生のコミットメント能力を育成する教授法に関する評価指標を検討することが課題となった。

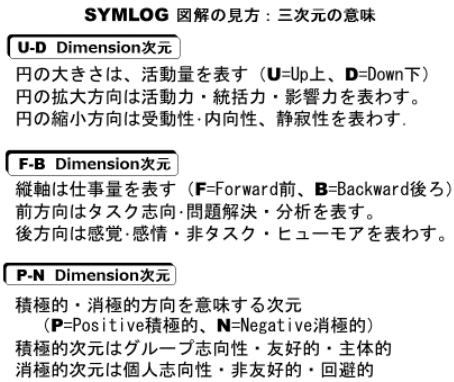
SYMLOG 分析評価[注)] をまず学生らはどのよう捉えているのかを明らかにした。

注）SYMLOG は System For the Multiple Level Observation of Groups の略字で通称 360 度からの観察システムと呼ばれている。ハーバード大学の Robert F. Bales によって開発されたグループにおける個人の評価とメンバーからの評価をダイヤグラム上で表すものである。アセスメント表は 26 項目からなる行動を表す用語群からなり、自分自身とグループメンバーに対して 26 項目について以下の評価点を用いて相互評価を行う。0 点：めったにない、１点：時々見られる、２点：頻繁に見られる

アセスメント表にて評価された得点の結果をコンピュータにて分析し表示したのが下記のダイヤグラム（SelfImage なでは省いて TotalImage のみ）である



図－1【事例 A】 学生自身がイメージする自分の現在（Current）の位置と理想的（Wish）な位置と非理想的（Reject）な位置の場が表示されている。またグループのメンバー（他者）から自分がどう見られているのかを Others で表示されている。



看護学科のゼミ単位における少人数教育活動において培われた人間関係について、SYMLOG 分析を通して測定（評価）を試みその結果を学生にフィードバックをしてコメントをもらった。その結果、**【自己イメージと他者イメージとのズレ】**に対してはす

べての学生が認識できていた。すなわち＜グループのメンバーからは自分が理想的な位置にいるものと見られていてうれしかった。少しでも理想に近づけるように頑張ろうと思った＞＜自分では気づかなかった自己と他者からみた自分のズレを読み取ることができた＞＜自己イメージよりも他者イメージではネガティブでありショックを受けた＞等と謙虚に受け止めていた。また**【自己イメージに対するポジティブフィードバック、ネガティブフィードバック】**については以下の様に認識していた。＜自己イメージよりは他者イメージが理想的な自己イメージに近かった＞＜自分で思っていたより他者は自分をポジティブに評価していた＞、＜仕事の達成能力は自己イメージよりも他者からの評価では高かった＞など、自己評価よりも他者によるポジティブフィードバックを認識していた。一方で、＜自己イメージよりも他者は仕事ができないとイメージしていた＞＜自分では皆に影響力があると思っていたが、それほど影響を及ぼしていないメンバーもいた＞など、ネガティブフィードバックを受け止めていた。また、さらに**【自己の客観的な認識に基づいた解決方法】**としては、＜自分はあまり感情を人に見せていないのではないかと思った。本当の自分を見せることを怖がらずもっと自分を出して行きたい＞＜理想的な位置から距離があるがそれに向ってがんばろうと思った＞＜周りへの影響力が小さいことがわかった。周りへ影響力を与えるためにもっと積極的に活動したり、皆と関わって行きたい＞＜人と一緒は嫌いという項目が高く出たが、自分の頑固で自己中心的な性格を見直し、他者を気遣える人を目指したい＞＜理想とする位置が現在よりも高い位置にあり自分からもっと前向きに人間関係を作ることが理想の自己に近づいていくと思った＞など、**自己との対話**を深めており、課題解決を模索していることがわかった。

これらのことから、SYMLOG 分析とそのフィードバックは学生にとって**【自己イメージと他者イメージとのズレ】**を認識することが可能である。その結果として**【自己の客観的な認識に基づいた解決方法】**を模索する、いわゆる自己を成長させていく力を育むことに有効な教材ともいえる。

一方、グループの中に自己を投入していく力、いわゆるコミットメント能力の測定指標については学生自身の客観的な自己認識にもとづいて**積極的に自分の意見や考えていることを周りに知ってもらうように努力したい**（学生Ｇ）**や理想的な自分になるには特に「リーダーシップ」「発言力」「責任感」を身につける必要がある**（学生Ｃ）などの記述に見られるように自己を投入する力に関する評価指標としては U-D Dimension の継時的（漸進的）変化を見ることによってコミットメント能力の変化として測定することが可能であることの示唆を得ることができた。

２．研究の目的

看護学科では必修科目である人間関係論の講義のなかでゼミ単位ごとに SYMLOG 分析を実施してその結果を学生へフィードバックし、その教育的意義（自己評価能力とコミットメント能力の評価指標）を明らかにした（名桜大学紀要 No16 2011）。その結果 SYMLOG 分析の U-D Dimension が学生の積極的な活動を意味するコミットメント能力を測定評価する指標として有効であることの示唆を得た。今回はその成果をもとに、看護学科の教育課程全般における①学生の成長と②コミットメント能力の変化との関連を明らかにすることを研究目的とした。

３．研究の方法

研究等の概要

調査１： 学生の経年的な SYMLOG 分析による変化を通して SYMLOG の評価指標としの有用性について検討する。

調査２： 学生の入学後の成長エピソードについてはその内容の類似性、普遍性を検討する必要があり、3 年生並びに 4 年生全体を対象として成長体験エピソードに関連するアンケート調査を行う。実施にあたっては協力依頼書を用いて説明して協力を得る。アンケートは自由記述留め置き方式をとり学科棟事務所前の回収箱にて回収する。

４．研究成果

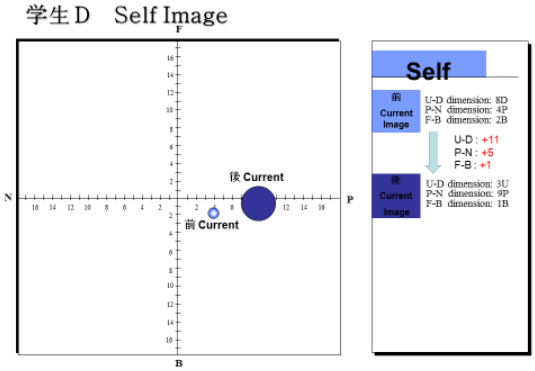
結果その１

2 年次学生のうち５人の研究協力が得られたので、1 年生の時からどのよう SYMLOG の変化をもたらしたのかを検討した。その一部を以下に示した。P-N Dimension と U-D Dimension に大きな変化が見られている。

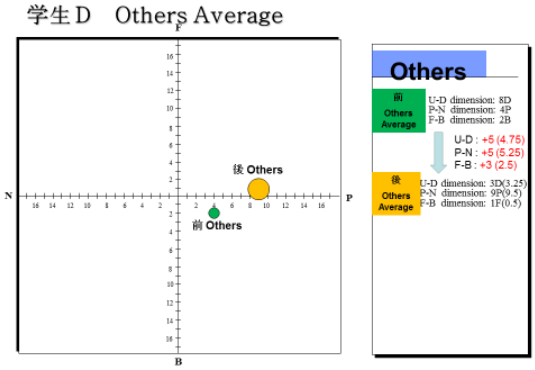
1年前と現在における**SYMLOG**の変差値

学生	Self Image			Others Image		
A	U-D	P-N	F-B	U-D	P-N	F-B
前	8D	4P	2B	8D	4P	2B
後	3U	9P	1B	3.25 D	9.25P	0.5F
変差値	+11	+5	+1	+4.75	+5.25	+2.5
B	U-D	P-N	F-B	U-D	P-N	F-B
前	4D	7P	2F	4D	7P	2F
後	1D	12P	1F	0	14.5P	1.25F
変差値	+3	+5	−1	+4	+13.5	+1.15
C	U-D	P-N	F-B	U-D	P-N	F-B
前	7D	0	4F	7D	0	4F
後	0	17p	3F	6D	8P	0
変差値	+7	+17	−1	+1	8	−4
D	U-D	P-N	F-B	U-D	P-N	F-B
前	1U	8P	1F	0	11P	4F
後	0	17p	3F	0	17P	3F
変差値	−1	+9	+2	0	+6	−1
E	U-D	P-N	F-B	U-D	P-N	F-B
前	2D	3P	1B	2D	3P	1B
後	4U	14P	1F	4U	14P	1F
変差値	+6	+11	+2	+6	+9	+2

学生Ｄ　Self Image



学生Ｄ　Others Average



学生からは「入学時は人前で話すことが苦手であったが、教養演習など多くの科目で発表する機会があり話せるようになった」「いつも気になったらレスポンスという合言葉で意識して対応するようにしていたので、自分が出せるようになった」などの声が抽出された。SYMLOG 分析では相手の影響力を示すのが U-D Dimension であり、その変化をとらえることができた。同じくそれは対人関係にも良い影響をもたらしており、メンバー(他者)からの評価においても P-N　Dimension は良好な方向への変化として表示されていた。

結果その２

3 年間、4 年間の成長エピソードを聞いたところ、4 年次のアンケートからは以下の内容が抽出された（回答率 40%）。尚アンケートによる回答は 3 年次 28 人（38%）4 年次 30 人（40%）であった。

●自分の意見を述べる際にも、相手の意見を尊重しながら言えるようになった。ディスカッションを積極的にかつ、進行できるようになった。

●高校生の頃より自分の気持ちを相手に伝えられるようになった。優先順位を考えて物事に取り組むようになった。交友関係の輪が広がった。

●自分の考えを相手に伝えるようになった。多くの人の意見をもらって、自分の考えに

根拠を持つようになったタイムマネジメントが上手になった。
●以前は、与えられた最低限の事だけをすればいいという考え(面倒だと思っていた)だったけど、様々なことに挑戦することには意味のあることだと考えるようになった。
●人に自分の思っていることを話す方ではなく、自分の感情にも気づかないことが多かったが、実習を通して自分の感情を振り返り、他人に話す機会が増え、自分の感情に気づき、他人に話せるようになった。同時に自分の意見を持つようになった。
●話し合うとき(グループ学習)で積極的に意見を言えるようになった。自分と反対の意見を持つ人の意見を尊重して、言葉をかけたり円滑に話し合いを進めることが出来るようになった。発表する場面も多く、聞く側の人を意識した発表の仕方。
●グループワークや実習の中で、その場面における自分自身の役割を自覚しながら、行動できるようになった。また、人の前で意見を言う機会が増えたことにより、ディスカッション能力が身についた。
●参画型教育であるため、発表する機会が多かったり、実習後のまとめの発表や卒論での発表などが多いため、まだ緊張はするけど人前で発表できるようになったことが成長したことだと思う。
●自分を振り返る機会が増えた。苦しいことがあっても、周囲に助けを求めたり、解決策を考えて、ある程度乗り越えられるようになった。
●入学したての頃は、人前に出て話したり、自分の考えを言葉にするのがとても苦手だったが、大学４年間を通して、人前で自分の考えを、述べる機会や、他の人との交流・ディスカッション、実習、グループワークが増え、以前よりも、考えを、言葉で表すことができるようになったと思います。
他者の考えを受け入れることが出来るようになった。アサーティブコミュニケーションが出来るようになった。わからないことや難しいことに対して、すぐ他人に頼るのではなく、自分で調べたり考えたりする力がついた。自分の価値観や視点だけで、他人の考えや行動の起こる出来事を判断しなくなった
●ディスカッション力を付けることが出来たと思う。ゼミがあったのが大きい。人の考えを聞く力や自分の考えを伝える力を養うことが出来た。また、教養演習での発表会などプレゼンテーション力もつけることが出来たのではないかと考える。
●今までは自分の意見を主張することに力を入れていたけど、教養演習などを通して、他の人の意見を聞いて、自分の考えと比べてどうかとか、その意見の良さを客観的に見ることが出来るようになった。

以上の結果から看護基礎教育において初年次教育から少人数によるカードメソッドなどの教材の活用、グループ学習などや協同学習理論を援用した話し合い学習など、いわゆる学生自らが授業を作りだす学生参画型教育（学生が主人公となるような授業作り）によって本学の学生は日常的にコミットメント能力が育まれていったものと言える。その評価法としての SYMLOG 分析はすべての学生についての経年的な変化をみることはできなかったが、研究の協力が得られた学生(1 年次 8 人、2 年次 8 人、3 年次 10 人　4 年次 8 人)によって明らかにされた P-N Dimension と U-D Dimension はその評価指標として使える可能性が示唆された

今後の課題としてはコミットメント能力の概念をさらに緻密化して、看護実践能力の中核概念としてどのように位置づけがなされ、そしてその育成が可能なのか、評価法の開発とともに継続した検討が待たれる。

また通産省から提唱されている社会人基礎力のコンピテンシーモデルとの関連で看護基礎教育における「看護実践能力」を巡っての総合的な検討が今後の研究課題として残された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

①「参画型看護教育」の成果と課題に関する研究－看護学科卒業生の就職施設の病棟管理者への質問紙調査を通して－　大城凌子・金城祥教・比嘉憲枝・永田美和子　名桜大学紀要　20 号 2015.3

②看護大学生の卒業後の自己教育力－卒業 6 か月、卒後 1 年目の変化－　永田美和子・武藤稲子・大城凌子，名桜大学紀要　20 号 2015.3

③教え・学び合う『課題学習法』を活用したピア・ラーニング（小児看護方法論の取り組みと評価）金城やす子.　看護教育、第 55 巻、第 5 号　医学書院　2014．5

④援助論としての「ほめる技術」金城祥教、精神科看護　Vol 42.No5　精神看護出版、2015

〔学会発表〕（計３件）

①看護基礎教育におけるコミットメンと能力の評価法に関する検討（SYMLOG 分析を用いて）第 34 回日本看護科学学会学術集会（名古屋）2014．11　金城祥教　大城凌子　永田美和子　金城やす子　井上菊恵

②「参画型看護教育」の成果と課題に関する研究－看護学科卒業生の就職施設の病棟管理者への質問紙調査を通して－日本看護研究学会第 41 回学術集会（広島）2015.8　永田美和子・大城凌子

③「看護大学生の卒業後の自己教育力－卒業 6 か月、卒後 1 年目の変化－　日本看護研究学会九州・沖縄地方会第 18 回学術集会（鹿児島）2013.11、永田美和子・大城凌子

〔図書〕（計２件）

① 金城祥教、第 9 回人間健康学部シンポジウム報告書　名桜大学広報 Meio Vol,40.2014.6

② 金城祥教、参画型看護教育評価プロジェト報告書　平成 26 年（個人資金出版）

６．研究組織

(1)研究代表者

金城　祥教　（KINJO YOSHINORI）
名桜大学・人間健康学部看護学科・教授
研究者番号：00205056

(2)研究分担者

大城　凌子　（OSHIRO RYOUKO）
名桜大学・人間健康学部看護学科准教授
研究者番号：80461672

金城やす子　（KINJO YASUKO）
名桜大学・人間健康学部看護学科・教授
研究者番号：90369546

徳田菊恵　（TOKUDA　KIKUE）
名桜大学・人間健康学部看護学科・助教
研究者番号：90461673

(3) 連携研究者

朴在鎬　嶺南大学名誉教授（韓国）